紹　介

『江戸の祭礼』

岸川雅範著　〈角川選書〉

KADOKAWA　令和二年二月　四六変形判　二六四頁　本体一七〇〇円

今日の東京の神社で行われる祭礼の中心は、神輿渡御である。しかし、この在り方がいったいいつ頃にまで遡るのか、といった問題については、存外知られてはいない。本書は、こうした素朴な疑問に答える形で、専ら近世（江戸）からの祭礼行事の変遷を明らかにするべく執筆された。例えば、江戸時代、神田明神（神田神社）や江戸山王権現社（日枝神社）、浅草三社権現（浅草神社）、亀戸天満宮といった大きな神社の祭礼には、山車が出されていた。とりわけ、江戸時代後期の神田祭（天下祭）には四五本前後が出されることが江戸幕府により決められていた。しかし、明治以降、それまでの幕府の公式年中行事としての規定が解除され、山車の数は、各氏子町の経済状況に左右され徐々に減少するに至った。その理由には、近代になって設置された電線の障害があったこと、更に根源的な理由として「氏子組織の変化や財政難」を挙げている。一方、今日の東京の祭礼行事の中核として神輿渡御が担うに至った源流を、明治四二年に盛大に行われた深川八幡祭であったと指摘する。それは、近代になって形成された町内会に根差す氏子町による大小様々の町神輿の興隆でもあった。また、昭和六十年の神田祭にて、町神輿としての女神輿が担がれたことの報告を契機として、女性と祭礼行事との関係。あるいは、江戸の祭礼に於いて、最も注目を集めた「附祭」（万度・練物・造物などで構成された行列）の在り様と、現代の神田祭での復活についても報告されている。他にも、神田明神の氏子町である外神田の江戸時代からの変遷。節分行事や初午祭などの江戸の伝統文化が近代に於いて、どのように廃絶されそして復活したのか。といった問題など、今日に至るまで引き継がれた神社の祭礼・祭祀の沿革が、江戸・東京という空間軸の下に平易に描写されている。本書を通じて、神道文化が土地に根差すものであることを改めて認識できよう。

紹　介

『先祖祭祀と墓制の近代―創られた国民的習俗―』

問芝志保著

春風社　令和二年十月　A5判　三六二頁　本体五〇〇〇円

本書は、宗教社会学的な「宗教と近代」という主題の検討対象として「先祖祭祀」「墓制」を据え、独自の視点によって新境地を開拓してきた著者の博士（文学）学位請求論文に加筆・修正が施され、上梓されたものである。本書において、著者は、主な研究対象を言説およびモノとすることで、「先祖祭祀」「墓制」をめぐる既往研究に見られるような〈天皇制イデオロギー／固有信仰〉や〈国家権力／民衆〉という二分法的な枠組みを乗り越え、近代化という社会変動がもたらしたその変容を丁寧に跡付けようとする立場にたつ。

内容を確認すれば、全三部のうち、第Ⅰ部においては穂積陳重や穂積八束、井上哲次郎ら知識人による「先祖祭祀」論を、彼ら自身が身を置いた地位からくる「拘束性」や当時の時代・社会状況を重視して捉え直し、その展開が「対外発信→内面化→規範・実体化」を辿っていたことを明らかにする。第Ⅱ部においては、特に東京・札幌といった都市部を中心に政府主導で整備されていく「墓制」に着目し、「世俗化」「西洋化」の様相を表していく過程を描き出し、このように政府が近代社会に相応しいと考えた墓地のあり方を「近代墓制」と定義する。第Ⅲ部においては、マスメディアを媒介として「墓癖家」「掃苔家」「墓相家」といった存在と人々とを回路にして繰り広げられた、墓というモノに投影された宗教的言説が検討される。そして、墓自体が備える表徴性ゆえに「全ての日本人が、あるべき墓に祀られるべき」との意識や実践が生み出され、根付いていったことを跡付ける。

現代日本は、平成十六（二〇〇四）年をピークに百年間で明治時代後期の水準へと総人口が激減していくという、千年単位でも類を見ない社会変動の最中にある。死者という「生きていた」人々への意識と態度は、今後どのように変容していくのだろうか。来し方行く末を思う時、著者の仕事に学ぶことはあまりに多いのである。

紹　介

『「八紘一宇」の社会思想史的研究』

黒岩昭彦著

弘文堂　令和四年六月　A5判　三二六頁　本体四五〇〇円

戦時下の日本において社会を席巻したと言われる標語「八紘一宇」。神武天皇の「橿原建都の令―八紘為宇の詔」より造られたこの標語をめぐっては、保守派よりは、その道義性に着目した肯定論が、革新派からは、侵略性に重きを置いた否定論があり、評価が定まっていない。このように評価が分かれる原因は、戦前の日本において「八紘一宇」が多種多様な用いられ方をされてきたことにある。同じ用語でありながら、時に革新的であり時に保守的であり、時に侵略的であり時に道義的であり、あるいは信仰的である場合さえあったのである。しかし戦後の「八紘一宇」論は、このような多様性を黙殺し、戦争イデオロギーを視座とした、平面的・一面的な理解が主流になっている。本書は、「多様性にこそ八紘一宇の本質がある」と理解する黒岩氏が、「八紘一宇の通史的検証を通して、その多様性を含めた実態を究明した」ものである。換言すれば、社会思想の一形態としての「八紘一宇」の多重構造を解き明かし、戦後の「八紘一宇」理解が、いかに平面的・一面的であるかを立証しようとしたものと言える。本書は、大きく二編に分かれる。第一編「八紘一宇の展開」では、中央における「八紘一宇」の展開を検証することを通して、それが国是とされるまでの過程を論じ、第二編「「八紘一宇」と地域主義」では、今も宮崎県に建つ「八紘之基柱（あめつちのもとはしら）」を事例として、その建設に関わった人物（相川勝六・田中智学など）とその思想の検証を通じて、「八紘一宇」の展開に地域主義が寄与したことを論ずる。黒岩氏の立場は、どちらかと言えば保守派に近いであろうが、それに捉われず、実証的に考察することに主眼を置いている。本書は「八紘一宇という社会思想史上かつてない影響を与えた用語の全体像の解明を最終的な目標に据える途上段階の一試論」とのことであるが、戦時下日本の思想史研究に一石を投じる意欲作である。

紹　介

由谷裕哉編

『能登の宗教・民俗の生成』

桂書房　令和四年九月　A5判　一六八頁　本体二五〇〇円

石川県七尾市の第三セクターのと鉄道西岸駅には、利用客のためのノートが置かれている。それは、TVアニメ「花咲くいろは」のファンが書き込むために置かれたノートであったが、それ以前に置かれていた第一冊目のノートに、利用客の少なさを危惧する複数の書き込みを見た編者の由谷氏は、ここから「このことが能登全体の人口動態とほぼ並行していること、いま一方で、それと能登の宗教・民族に関わるこれまでの研究動向とがあまりにも乖離していること」（緒論）について認識を新たにする。本書は、この「変貌する能登と能登研究との乖離」を埋めるべく、能登半島の宗教・民俗に関するこれまでの捉え方の代案を求めるという意図のもとに編集されている。本書で代案として提示されるのは、①「（漂着文化論のような他所からの一方的な影響ではなく）交通・交流」、②「（エティックに比較可能な枠組みに捕らわれない）イーミックな志向」、③「（真宗以外を含む）仏教文化」、④「（起源の探求や消滅する民俗の記録ではなく）生成することへの注目」という四つのポイントである。本書は、由谷氏の「緒論」のほか、鏑木紀彦「能登国石動山大蔵坊の里修験――加賀国宝光院（延寿寺）の事跡から――」、由谷裕哉「能登における郷土研究の目覚めから終焉まで――宗教と民俗を中心に――」、本林靖久「能登の真宗民俗と女性――嫁のコンゴウ参りを中心に――」、干場辰夫「鵜祭再考――古文書から「鵜祭＝年占」説を問う――」の四編の論考から構成されているが、いずれも何らかの形で「生成」という視点を共有し、能登半島の宗教・民俗に関するこれまでの捉え方の代案を求めようとするものとなっている。戦後失われてゆく民俗事象の記録と記述、文化財（文化遺産）に認定された事物の保存という観点ではなく、交通・交流によって「何が生成していくのか」という観点は、能登のみならず、他地域の宗教・民俗を再考する際にも有効な視点となろう。